

「ナントカのカントカなだれそれの『正体』とか「東大発ハーバード經由議事堂行きに乗ったスパーエリート」の暴走する『素顔』という類の広告は中刷りなどですつかりおなじみのもの。まあ人は皆大なり小なり社会的な自分と素の自分を使い分けていると思うが、そのかい離があまりにひどくなると問題だし、それが暴かれるとなると大変なことであろう。

閑話休題。先週から三回シリーズで放蕩息子を取り上げているが、このたとえの「妙」はこの後半部にあると思う。というのもここを読めば読者はほぼこう思うからだ。「父はひどい。兄貴が怒るのは無理もないことだ」「孝行息子が放蕩息子をなじる、もつともだ。兄貴、もつと行ってやれ！」といった感じである。しかし丁寧に読み解いていくと一見孝行息子に思える兄貴の素顔はやはり罪びとのそれ。以下孝行息子の正体に迫ってみたい。

一、奴隷根性

弟がすべてを金に換えて旅立った

後父の元を離れなかつた兄。その日も彼はいつもと同じように疲れた体を引きずって畑から帰ってきた。しかし違うことがあった。なにやらあたりが騒々しい。祭りもないのに大宴会の様子である。そこで兄はしもべを呼び、顛末を聞き、そして怒った。「今更どのツラ下げて帰ってきたんだ」と言った具合でろう。そうしてむくれた兄は祝宴の喜びの外の暗がりに佇んでいたのだが、そこに父親がやってくる。なだめるためにだ。そのとき兄の怒りは爆発した。「見ろ、今までおれはあなたの奴隷になつてきた、そして言いつけは全部守つてきたぜ。だが、あなたはなあ」と。時に「仕えてきた」と訳された語は直訳では「奴隷になる」だ。しかも「長年の間」である。確かに兄は父親の言いつけを守つてきた。だがそれは心からのものではなく、奴隷的な屈従であつた。だからこそ彼は「不公平」に耐えられなかつたのである。

二、断絶

新改訳や新共同訳聖書は二九節を「わたしは何年もお父さんに仕え」と訳しているが、原文には「お父さん」という言葉はない。代名詞の「あなた」が用いられている。おそらく日本語では父親を「あなた」呼ばわりすることはよほどのことがない

限りは無いので「お父さん」の語を挿入したのかと推察できるが、この修正はいただけない。むしろ隷属を長年に強いられてきたと思ひ込んでいた兄は鬱積した不満をぶちまけているのだから、「あなた」「なんぢ」「you」を用いるほうがよりイエスの意図に近づくことが出来ると思えるべきだ。要は見た目は孝行息子であつたが、兄と父との親子の絆はとうの昔に切れていたといふことである。だからこそ兄は父に対して「見ろ、あなたはなあ」と息巻き、弟のことは「このあなたの息子」と言つて切つて捨てた。体は傍にいたかもしれないが、その精神的な距離は無限遠にも等しいほど離れてしまつていたので。

三、頑なさ

放蕩した弟の帰還と相好を崩して喜ぶ父を受け入れられない兄。そこに父がやってくる。兄は自らを奴隷と呼ぶが、父にとつてはどちらも息子だ。なんとか宴席に加わるようにいろいろと(二八節・新改訳)なだめてみた。思うにこれは決して父親が自らのメンツを保つためにそのように説得したのではない。それは父が兄に対して「子よ」と呼びかけていることからわかる。(三一節・新共同訳)父はあくまで家族の愛のきずなを結びたかつたのだ。だが兄の姿はどうだろう。数年にわたつて奴隷

根性が染み付き、言葉と態度によつて断絶を宣言した兄の心はそうそう変わるものではない。むしろ父が真実なことを語るたびに彼の心はねじくれ、意固地になつていったといふことは想像するに難くない。そして物語は歌舞音曲のさんざめく宴席を扉一枚隔てた暗がりに父と兄が立ち尽くしたまま中断される。少なくともこの時点まで彼は「頑な」だった。

* * *

「放蕩息子のたとえ」として知られるこの箇所、最近では「失われた息子たちのたとえ」と名付けられる説教者が増えていたようだ。そうすれば確かにルカ一五章は「失われた羊」「無くした銀貨」そして「失われた息子たち」のたとえとしての一体性を持つていことがよくわかる。多くの読者がそう読んでしまふであろう一見親孝行な兄息子の仮面の下にあつたのは、父に対しては卑屈な奴隷、無一文で帰つてきた弟のことはその存在すら認めない頑なさであつた。「失われたもう一人の息子」それが兄の素顔であり、正体だ。そう考えると兄もまた父の愛を必要としているのは自明のこと。幸いにして父は宴席を中座し、暗がりに佇む兄を忍耐深く説得している。兄に必要なことは弟と全く同じ。我に返り、魂の向きを変えることである。